

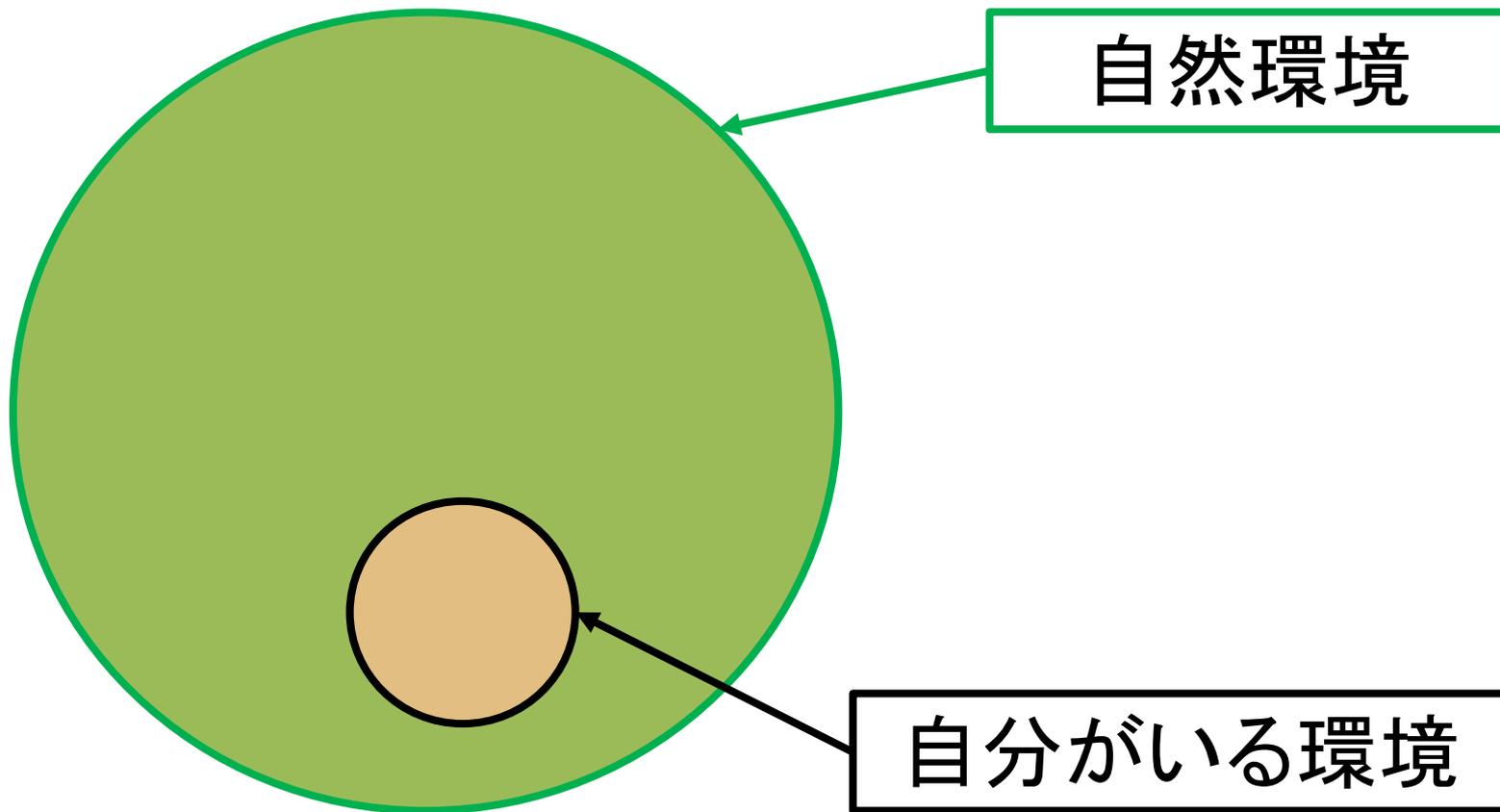
セミナー:社会デザインと実践の方法
(Methods for Social Design and
management)
食料・生態系

2020年9月25日(金)

東京大学大学院 農学生命科学研究科
八木信行

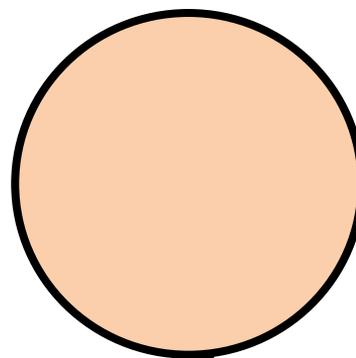
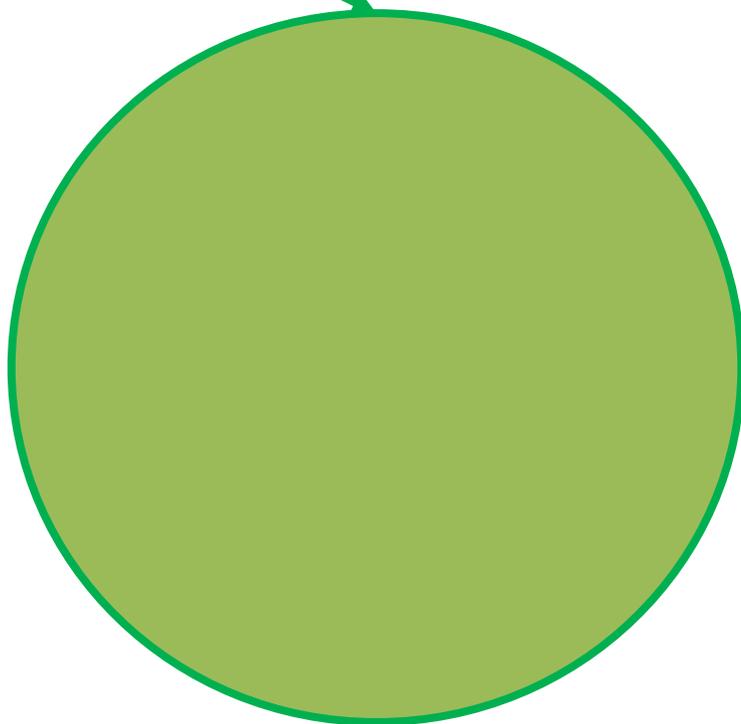
食料・生態系の分野は デザイン可能なのか

- 結論から先に言うと
- あなたが欧米人であれば、デザインはできると思う可能性が高い(外にいる第3者だから)
- あなたが日本人であれば、デザインはできないと思う可能性が高い(中にいる当事者だから)
- その中であなたはどう振る舞うべきかが課題。両者の特性を知った上で、架け橋的な役割を果たすことが期待される。



①自分がいる環境は、自然環境の中の一部だと感じている

自然環境



自分がいる環境

② 自分がいる環境と自然環境とは
離れていると感じている

環境意識に関する日本と欧米の差

日本人の環境意識

- 人間とその外部環境はつながっているという考え方が存在している
- 実際、江戸は循環型社会
- 今も、「循環型社会形成推進基本法」(平成12年に成立)や、それに基づく「循環型社会形成基本計画」などが存在
- 人間も外部環境の一部としてとらえている考え方

(都市計画学者Urban Design) Giddings, Hopwood, O'Brien (2002) "Environment, economy and society: fitting them together into sustainable development" Sustainable Development 10:187-196. の議論

- 多くの米国人・英国人は、郊外での環境保護を優先。
- 都会の環境への関心は少ないが、郊外の野生の動物などを保護することには熱心。
- この根源は、環境が人間と切り離された存在であることなどにある。

八木の注:これは欧州の都市は城壁に囲まれていたことと関係しているのではないか

心理学者Richard Nisbett (2004) . The Geography of Thought. 「(邦訳)木を見る西洋人、森を見る東洋人」の議論

- 同じ水中の絵をアメリカ人と日本人に見せる実験: アメリカ人は中心にいるもの(大きな魚)から話を始めるが、日本人は周囲の環境(池の様なところ)から話を始める結果が得られた。
- 西洋人は対象物を周囲の環境と切り離して捉えるクセ。そしてその対象物を分類し、規則性が適用できるか考える。
- 東洋人は対象物と周囲の調和を考えるクセ。そして形式を内容から切り離すことを拒む。
- 西洋人は東洋人よりも環境を思い通りにできると信じている。



日本が生物多様性条約で推進していたSatoyamaイニシアティブも2010年当初、豪州は一時期反対



2010年名古屋での生物多様性条約COP10の様子(筆者撮影)

モザイク状の土地利用・里地里山

(富山県上空にて筆者撮影)



長良川の鵜飼いの師匠の言葉

- 「鵜」とは書くが、弟は人間の方
- 人工ふ化した鵜は用いない
- それをすると、「人間が大自然に生かされている、との鵜飼いのメッセージ」が損なわれるからだという



鵜飼いで漁獲したアユは別格の高値がつく



Photo: Nobuyuki Yagi

経済、環境、社会のバランス



結論：食料や生態系に関わる分野をデザインしようとする（八木の仮説）

- 東洋人はホリスティックに社会・経済・環境が同時に成り立つデザインを目指して困難に直面するか、またはデザインしてはならないとの信念（人間は神ではないとの信念）を見せるだろう
- 西洋人は、環境だけを切り離してデザインし（人間立ち入り禁止の野生保護区設置）、また経済だけを切り離してデザインし（経済効率を最大化させる単一作物の大規模農場を設置）、更に社会だけを切り離してデザインし（ネイティブアメリカンの居留地などを設置）、結局、デザインが目的化したり、人間の幸せが損なわたりしがち。
- 学生の皆さんは、この両者を橋渡しする役割が求められている（中庸を求めるのは東アジア特有の発想との説（Nisbett）もあるが・・・）